

## 十二、森鷗外の『栗山大膳』と 篠栗

寛永九年（一六三二）の六月に起こった栗山大膳騒動は、福岡藩が潰されてしまうかもしれない大事件でした。重臣筆頭の栗山大膳が主君の第二代藩主黒田忠之を、幕府にたいして謀反をくわだてていると訴え出たからです。この事件は昔から多くの芝居や語り物にされてきましたが、森鷗外にも『栗山大膳』というおもしろい歴史小説があつて、しかもその中に篠栗の地名が出てきますので、いつそう興味をひかれます。

幕府の呼び出しを受けた忠之は、死を覚悟して江戸に向かいますが、国元の藩士たちもお国取り潰しは必至とみて、幕府軍が寄せて来るなら一戦をまじえ、城を枕に討ち死にしようとして一決して、防戦の持ち場を決めます。その持ち場は赤間口、畝町、金出口、金出宿、幸府口、比恵の原、岩戸口、三瀬越、唐津口にして、ほとんど想像をまじえずにこれを書いたことは確かです。ただ筆者は残念ながら、それらの資料に接する便宜を、まだ得ておりません。

ちなみに忠之への審決は、藩政不行き届きのかどで領地を没収するが、先祖の軍功に免じて再度下げ渡すということで、騒動は決着します。そしてこれが忠之の数々の非行から福岡藩を守ろうとする、栗山大膳の起死回生の策であつたというのが、後の大方の見方になっていますが、事実は果たしてどうだったのでしょうか。

生松原、船手（軍船隊）と城内の十二方面で、このうち金出口には野村右京以下七名、金出宿には黒田監物以下六名が当てられます。もちろん、この人物たちは馬廻格以上の藩士で、それぞれに一門徒者を率いていますから、各持ち場にそうとうの部隊を集結させようとしたわけです。

ところでこれらの持ち場のうち、金出宿はもちろん篠栗宿のことで、八木山方面から篠栗街道を寄せて来る敵にそなえたわけですが、金出口とはどこのことでしょうか。若杉区に金出口という小字がありますが、戦略的にみてここは考えられません。前記の持ち場が街道ごとにはだいたい二か所の二段構えに配置されていることからみれば、これは金出宿の前衛陣だつたと思われませんが、あるいはまたずばり現在の金出であつて、猫峠越えの敵にそなえたものだったかもしれません。

鷗外はこの自作について、ただ筋書きを書いただけで小説というまでには熟していないという意味のことを言っていますから、『栗山大膳記』などを資料



現在の金出。昔は一の井手（鉄の井手）の水がかり一帯を金出と呼んだらしく、その範囲は今の篠栗市街の東部にもおよんでいました。